日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
パフォーミングアーツ事業部
2021年度 活動報告書

The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS
Performing Arts Division
2021 Annual Report

日本財団
DIVERSITY IN THE ARTS

01 ____________ 1_あいさつ | Forward

02-09 __________ 2_座談会「TCFの成果を問う」| Roundtable Discussion “Where the TCF’s accomplishment lies”

10-19 __________ 3_活動報告 | Project Report

2021年4月 True Colors DIALOGUE
April 2021 True Colors DIALOGUE

2021年4月 True Colors CIRCUS
April 2021 True Colors CIRCUS

2021年5月 True Colors FASHION「身体の多様性を未来に放つダイバーシティ・ファッションショー」
May 2021 True Colors FASHION “The Future is Now!”

2021年6月 ミュージック・ビデオ「You Gotta Be」
June 2021 Music Video “You Gotta Be”

2021年12月 True Colors Film Festival 2021
December 2021 True Colors Film Festival 2021

20-21 __________ 4_協働事業 | Cooperative Projects

22-23 __________ 5_総括 | Summary

24 ____________ 6_広報成果 | Publicity Report

ごあいさつ　Forward

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS パフォーミングアーツ事業部では2019年以来、障害・性・世代・言語・国籍などのあらゆる多様性があふれ、皆が支え合う社会の実現を目指し、ともに過ごす場を楽しむ芸術祭「True Colors Festival 超ダイバーシティ芸術祭」(以下、TCF)に取り組んでまいりました。

2021年度のTCFは、長期化する新型コロナウイルス感染拡大の中、海外在住の演出家チームがオンライン参加したドキュメンタリー演劇(4月)、国内外からアーティストが集ったミュージックビデオの制作・発表(6月)、オンライン映画祭の開催(12〜1月)など、発表方法をオンラインへと拡充しながら、メッセージの発信に尽力してまいりました。また、新型コロナウイルス感染拡大により延期となっていたサーカス公演(4月)やファッションショー(5月)もオンラインにより配信。2021年夏に開催された「東京2020パラリンピック」の開閉会式では、両作品の出演者をはじめ、これまでTCFとともに活動してきた表現者たちの活躍を数多く見ることができました。

本事業報告書では、2021年度の活動記録とともに、表現者や制作者との出会いによって広がった相互的な取組も掲載しています。ぜひご一読いただき、時代とともに歩みを進めるTCFの活動をご支援いただけましたら幸いです。

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
理事長　横尾紀彦

The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS Performing Arts Division has strived to realize a diverse society where everyone supports each other regardless of differences in abilities, gender, age, language, and nationality, and starting in 2019, has organized "True Colors Festival" (TCF), a performing arts festival where joy is shared by everyone.

In the fiscal year of 2021 where the prolonged COVID-19 pandemic continued its spread, TCF has presented a documentary theater piece complemented with online participation by the overseas-based direction team (April), a production of a music video with artists from around the globe (June), an online film festival (December through January), and along with other projects, continued to transmit our message while expanding our presence to online platforms. The circus performance (April) and the fashion show (May) both of which were delayed due to the pandemic were also successfully streamed online. We had the pleasure of seeing the casts from the two online shows, along with other performers we have joined forces with, give an impactful performance in the opening and closing ceremonies of the Tokyo 2020 Paralympic Games.

This annual report captures our activities for the fiscal year of 2021 as well as mutual projects that began with an encounter with the performers and producers. We hope for your continuous support of TCF and our pursuance to move along with the times.

Norihiko Yokoh
Chairman
The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS

「TCFの成果を問う」
“Where the TCF’s accomplishment lies.”

2021年、東京では東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されました。パラリンピックの開閉会式で、これまでTrue Colors Festival（以下、TCF）に参加したパフォーマーの方々の活躍を数多く見られたことは、TCFにとっても大きな喜びでした。障害のあるパフォーマーにとって、2021年はどんな年だったのでしょうか。そして、次に描く未来は？ TCFプロデューサーの森真理子が、小澤綾子さん、鹿子澤拳（かのけん）さん、栗栖良依さんと語り合いました。（以下、敬称略）

The Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games were held in Tokyo, 2021. It was a delight to see many performers from past True Colors Festivals (hereafter TCF) programs participate in the opening and closing ceremonies of the Paralympics. How was the year 2021 for performers with disabilities? What’s in store for them next? TCF Producer Mariko Mori spoke with Ayako Ozawa, Ken Kanokozawa (a.k.a. Kanoken), and Yoshie Kris.

小澤綾子／Ayako Ozawa

千葉県生まれ。小学校の頃からだんだん走るのが遅くなり歩き方がおかしくなり、周りと違っていく自分に気づく。20歳で筋ジストロフィーと診断を受け、10年後には車椅子、その先は寝たきりと医師から告げられる。「筋ジスと闘い歌う」と掲げ、シンガーソングライターとして活動を開始し、現在は学校、病院などで講演ライブを行う傍ら、「車椅子チャレンジユニット BEYOND GIRLS」や「ゆるミュージックほぼオールスターズ」として活動。TCF関連では「サマースクール」（2018）参加後、「True ColorsJAZZ」（2020）に出演。東京2020パラリンピック閉会式では車椅子型ドラムに座ってパーカッションを担当した。

Born in Chiba prefecture. During elementary school, her running became gradually slower and her walking became odd, and she noticed she was growing differently from others. At age 20 she was diagnosed with muscular dystrophy and was told that in 10 years she will be in wheelchairs, and eventually be bedridden. She begins her singer-songwriter career with a slogan to “sing to fight MD” and performs at schools and hospitals, while also performing in groups <Wheelchair Challenging Unit BEYOND GIRLS> and <Yuru Music Hobo All Stars>. With TCF, she has performed in <Summer School> (2018) and <True Colors JAZZ> (2020). In the closing ceremony of the Tokyo 2020 Paralympic Games, she played the beats on wheelchair-shaped drums.

鹿子澤拳／Ken Kanokozawa

秋田県生まれ。通称かのけん。生まれつき耳が聞こえない。幼い頃にテレビで見てダンスを始め、筑波技術大学ダンスサークルでストリートダンスを、2016年には単身渡米し、NY・Broadway Dance Center（BDC）にてさまざまなジャンルのダンスを学ぶ。TCF関連では「True Colours Festival2018」（シンガポール）、障害のあるパフォーマーを育成する「サマースクール」（2018）、「True Colors MUSICAL」（2020）、「True Colors CIRCUS」（2021）に出演。東京2020パラリンピック開会式には飛行機の衣装で登場し、手話を使った会話シーンが話題を集めた。

Also known as Kanoken. Born in Akita prefecture, he is Deaf from birth. He began dancing in his early childhood after seeing it on television, then learned the street dance in a dance club at Tsukuba University of Technology. In 2016 he went on to NY’s Broadway Dance Center (BDC) to study various styles of dance. With TCF, he has performed in <True Colours Festival2018> (Singapore), <Summer School> (2018), an educational program to nurture performers with disabilities, <True Colors MUSICAL> (2020), and <True Colors CIRCUS> (2021). For the opening ceremony of the Tokyo 2020 Paralympic Games, he made an appearance in an airplane costume and his vibrant sign language had lured much attention.

栗栖良依／Yoshie Kris

東京都生まれ。東京造形大学卒業後、イタリアのドムスアカデミーにてビジネスデザイン修士号取得。2010年骨肉腫による右下肢機能全廃で障害福祉の世界と出会い、SLOW LABELを立ち上げ。2014年よりヨコハマ・パラトリエンナーレ総合ディレクターとして、障害者の創作活動におけるアクセシビリティ改善に取り組む。TCFにつながる障害者の育成プログラム等を鈴木京子さんと共に企画（2017-18）、「True Colors CIRCUS」クリエイティブプロデューサー。東京2020パラリンピック開閉会式ではステージアドバイザーを務めた。

Born in Tokyo prefecture. After graduating from Tokyo Zokei University, she obtained a master’s degree in Business Design from Domus Academy, Italy. After the removal of her right leg due to osteosarcoma in 2010, she finds the vast world of welfare for persons with disabilities, which led to her launch of SLOW LABEL. As the Executive Director of Yokohama Paratriennale since 2014, she tackles to improve accessibilities in creative productions by people with disabilities. She has co-organized projects such as the educational programs with Kyoko Suzuki (2017-18) that would lead to TCF and had filled the position as the Creative Producer for <True Colors CIRCUS>. She was the Stage Advisor for the opening and closing ceremonies of the Tokyo 2020 Paralympic Games.

聞き手 | 森真理子／Moderator: Mariko Mori

愛知県生まれ。大学で文化人類学を専攻後、美術館等での勤務を経て、京都造形芸術大学舞台芸術研究センターにて舞台制作を行う。2007年より、フリーランスで演劇・ダンス・音楽・美術の企画制作・プロデュースを行う。2009年より「まいづるRB」ディレクターを務め、地域と連携した事業を実施。「六本木アートナイト2014」や「さいたまトリエンナーレ2016」のプログラム・ディレクターを務め、フェスティバル事業に携わる。TCFフェスティバル・プロデューサーとして、フェスティバルの各プログラムの企画や全体統括を行う。

Born in Aichi prefecture. After studying cultural anthropology at university, she has worked at museums and other artistic sites before being responsible for stage production at Kyoto Performing Arts Center of Kyoto University of the Arts. Since 2007, she plans and produces for theater/dance/music/visual arts as a freelancer. She is the director for <Maizuru RB> since 2009 and organizes projects closely linked with the local community. She has been involved with large-scale projects such as <Roppongi Art Night 2014> and <Saitama Triennale 2016>. Currently, she works as TCF Festival Producer and coordinates every program and supervises it as a whole.

自分は何者として表現すればいいんだろう

森　まずは、みなさんとTCFとのこれまでを振り返りたいと思います。栗栖さんには当財団の事業に2017年から関わっていただいていますね。

栗栖　2014年のヨコハマ・パラトリエンナーレで初めて障害のある人とパフォーマンスを制作し、国内にプレイヤーが少ないこと、インフラ整備ができていないことに衝撃を受けました。「日本でオリパラを開催すると言っても、このままだとロンドン大会の足元にも及ばないぞ」と。日本全体の大きなムーブメントとしてその状況を改善しようと奔走してきました。

その過程で日本財団のみなさんに出会い、2018年にはプレイヤーを発掘・育成するためのサマースクール（主催：日本財団DIVERSITY IN THE ARTS）を企画しました。障害のあるパフォーマーをトレーニングできる人材やメソッドが国内に足りていないと思っていたからです。そこから際立ったプレイヤーが出てきて、True Colors JAZZ（以下、JAZZ）やTrue Colors MUSICAL（以下、MUSICAL）に発展しました。小澤さんもこのサマースクールに参加してくれましたね。

小澤　私もその頃からパラリンピックに何らかの形で関わりたいと思っていて、スキルアップのために参加しました。最初は「歌が上手くなりたい」という一心で自分のことしか見えていなかったのですが、松永貴志先生が「みんなの可能性を活かしてコラボレーションすることで、これまでなかったものを生み出せるんだよ」と視野を広げてくださって、「ここで出会った人たちとおもしろい表現ができれば世界をびっくりさせられるんじゃないか」と、それまでの自分の枠を超えた考え方ができるようになりました。

サマースクール2018にて、松永さんのレッスンを受ける小澤さん（写真：井上嘉和）

その後出演させていただいたJAZZでは、国も言語もバックグラウンドも違う人達とひとつの作品を作れたことに感動し、「私ってまだまだできることあるじゃん」と思ったし、「音楽の道・表現の道を極めていこう」と志すきっかけになりました。ベタ褒めしちゃいましたが（笑）、自分の人生にとって大きな出来事だったと思っています。

森　かのけんには2018年にシンガポールで開催した芸術祭をはじめ、MUSICALやTrue Colors CIRCUS（以下、CIRCUS）にも出演いただきました。プログラムを通して感じたことや考えたことはありますか？

鹿子澤　パフォーマーとして歩みはじめてからずっと、自分探しの旅をしてきたように感じています。「耳の聞こえない人」として舞台に立ち始めたのですが、聴者と関わるときに日本語音声でやりとりをする場合もあるし、補聴器をつけると微かな音を探している自分がいたりするんですよね。そんな自分は「聞こえない人」なの？って思うことがこれまで何度もあって、じゃあ自分は何者としてパフォーマンスすればいいんだろうって悩む日々でした。でも、TCFを通して本当に多様な人たちと出会って、ひとりの人間としてまっすぐ自分を見てもらえる機会がたくさんあって、「“聞こえない人”ではなく“かのけん”として表現すればいいんだ」と思うようになりました。この考えにたどり着けたのは大きな財産だったと思っています。

森　そこに気づいたのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

鹿子澤　MUSICALで アメリカに行ったとき、「かのけんってどういう人なの？」とストレートに質問されたんです。どれくらい聞こえていて、どういうサポートが必要なのかって。そのときに僕、黙っちゃったんです ね。それまで遠慮じゃないけど、自分のことをあまり主張してこなかったから、うまく説明できなくて。そんな自分自身に気づけたことがまず大きかったです。そして、さっき話した「聞こえない自分」としての葛藤を含め、いろんなことを正直に伝えてみたらすっと通じてすごくフラットに受け止めてもらえたので、「これでいいんだ」と思いました。

True Colors MUSICALにて、猫役を演じる鹿子澤さん（写真：冨田了平）

森　CIRCUSの本番は新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言のため中止となりましたが、公開ゲネプロは開催することができましたね。

栗栖　CIRCUSはオーディションで出演者を決めたので新しいプレイヤーを発掘できましたし、そのオーディションがきっかけで日本初のソーシャルサーカスカンパニー「SLOW CIRCUS PROJECT」も発足することになりました。公演の中止は残念でしたが、ゲネプロだけでも開催できたのはありがたかったです。あれがなかったら、プレイヤーのモチベーションが続かなかったかもしれません。発表の機会がある

ことでチームがひとつになれるし、人の目に触れることでプレイヤーは成長できるんだと強く感じました。

森　パラリンピック閉開会式にはTCFのプログラムに参加してくださったパフォーマーが多数出演されていて、私たちもうれしい気持ちでテレビを見ていました。

栗栖　2020年の年末に当時の演出チームが解散になったときは私も相当悩みましたが、長い時間をかけて発掘・育成してきたプレイヤーを閉開会式に送り出したかったし、そこに望みをかけてきた人たちの思いの強さを知っていたので、残ることにしたんです。さまざまなプレイヤーが表に裏に活躍する場になり、踏ん張ってよかったと思っています。

鹿子澤　自分は開会式の「片翼の小さな飛行機の物語」の中で、「おしゃべりな飛行機」の役で出演しました。最初は「静寂な飛行機」の予定だったのですが、僕があまりにも楽しそうに手話で話すから途中で役名が変更になったんです（笑）。現場では、これまでのTCFやSLOW CIRCUS PROJECTでの経験を活かして、大きな舞台に慣れていない方をフォローすることを心がけました。出演者同士が「この人ってどんな人なんだろう？」と遠慮している状態だと100%力を発揮できないと思ったので、お互いをよく知って、現場の雰囲気が良くなるようにしようって。自分なりの密かなチャレンジでした。

パラリンピック開会式の衣装を身につけた鹿子澤さん（右上）

小澤　私は閉会式に車椅子ドラムで参加させていただいたのですが、リズム感もないし手も早く動かせないし、最初は「世界の舞台で恥をかいてしまうかもしれない」と不安でした。でも、栗栖さんが「自分にしかできない表現があるはずだから研究してみて」とアドバイスをくださって、その日から鏡を見て練習し、滑らかに手を動かすように工夫したんです。そうしたら、周囲から「かっこいい!」とこれまでにない感想をいただけて。「表現も生きることも、全部自分らしくすればいいんだ」と思うことができました。この先の未来に、あの閉会式のようなカラフルな景色をつくりたいと思っています。

パラリンピック閉会式の衣装を身につけた小澤さん（右）

作り手側にも当事者を

森　TCFも元々はオリパラ開催の機運とともに2020年を目指して立ち上がったプロジェクトです。オリパラを経て、障害者や障害のあるパフォーマーを取り巻く環境は変わったと感じていますか？

栗栖　オリパラを機にさまざまな文化プログラムが立ち上がりましたし、法律も整備され、プレイヤーも育ってきました。ただ、その表現がアメリカやイギリスのレベルに達しているかと言われるとまだまだですし、民間の劇場ではアクセシビリティが充分ではありません。映画やテレビといった一般的なエンタメにも進出できていませんよね。そちらが変わらなければ、社会は変わらないでしょう。

森　何が足りないのでしょうか。

栗栖　表現者もそうですが、プロデューサーや演出家などつくり手側にも当事者が増えなければいけないと思っています。1から9までを健常者がつくり、最後の10だけ障害者をキャスティングするのでは、「それっぽい絵面」を作っているに過ぎません。企画段階から多様な視点が入って初めて、その人達の表現が活かされた作品になるのではないでしょうか。

鹿子澤　この数年で障害のある方でも参加できる企画は増えましたが、まだまだ変わっていないこともあるなと思います。舞台出演のオファーを受けて「手話通訳が必要です」と伝えると、「手話通訳ってこちらが手配するんですか？ いくら位かかるんですか？」と戸惑われてしまったり。こちら側が必要な情報を集めて伝えて交渉しないと、聞こえる人と同じスタートラインに立てないんですね。そこに立つ前にこちら側に労力がかかる時点で、世間が謳う「平等」からかけ離れていないでしょうか？

　たとえば、必要なサポートのリストのようなものがあって、そこにチェックをするだけで「じゃあ手話通訳を手配しますね」「スロープを用意しますね」とスムーズにサポートが受けられる。そんなふうになったら、自分の表現を100%発揮することだけに集中できるのになと思います。

小澤　駅に新しくエレベーターが設置されるなど、環境面はオリパラで進んだ実感があります。先日コンサートを行ったのですが、会場はエレベーターやスロープ、バリアフリートイレが揃っていて最高の環境でした。ただ、一点だけ気になったのが、出演者がステージに上がる動線にスロープがなかったこと。もしかすると、障害のある人が観客として来場することは想定していたけれど、企画側・出演側として来ることは想定されていなかったのかもしれません。

　また、障害のあるアーティストが表現を磨くときのハードルが高いなと感じています。歌が上手くなりたいと思っても、車椅子で通えるボイストレーニング教室がなかなかなかったり、筋肉が増えない病気なのに「腹筋を鍛えましょう」と指導されたり。病気や障害を理解した上で指導してくださる方を見つけることが難しいんです。こういった面も変わっていくといいですね。

森　小澤さんが挙げてくださった会場の話は、私たちも会場を借りるときによく経験することで、社会の意識を象徴していると感じています。

栗栖　障害者が社会に出て生きていく選択肢が、「パラリンピアンか、B型作業所（*1）か」ではいけないと思っています。障害があっても表現者やつくり手を目指すことができる社会にしたい。パラリンピック閉開会式でひとつの種を蒔くことはできたと思います。きっと、「自分も舞台に立てるかもしれない」と感じてくださった方がいるはずです。次はもう一歩進んで、舞台をつくる側、見せ方を考える側になる選択肢を提示できたら。

　そのためには、TCFに育ててもらったプレイヤー、パラリンピック開閉会式に出演したプレイヤーが、「自分が活躍できてよかった」と満足するのではなく、社会全体や次の世代のために発信・行動することが大事だと考えています。かのけんや小澤さんがこの1〜2年でどういうアクションを起こすか。プレッシャーをかけるようですが、そこにTCFの成果が問われていると思います。

*1 就労継続支援B型。障害のある人が一般企業への就職が不安、あるいは困難な場合に、雇用契約を結ばずに軽作業などの就労訓練を受けることができる福祉サービスのこと

True Colors CIRCUS公開ゲネプロ終了後、挨拶をする栗栖さん（写真：冨田了平）

小澤　本当に特別な環境を与えてもらったと思っていますし、それを次につなげたいと考えています。病気や障害が重く生きることに精一杯な人たちもいるなかで、表現ができるのは恵まれたことなのかもしれません。そういったことも念頭に置きながら、障害のある人が自分のやりたいことに挑戦できる環境、ちゃんとお金を稼いで健やかに生きていける環境を整えていきたいです。

鹿子澤　アウトプットがワークショップになるのか舞台になるのかはわかりませんが、ひとつのプロジェクトを起こしたいという大きな野望を抱いています。聞こえない人のキャスティングや現場の雰囲気づくりなど、さまざまな現場や心情を経てきた自分だからできることがあるかもしれません。栗栖さんからいつも発破（はっぱ）をかけられているので、早く形にしなければと思っています。

変わりたいと思う人に機会を提供したい

森　ひとつの目標だったオリパラを終え、皆さんが次に思い描いていることを教えていただけますか？

小澤　直近の大きな目標は、「紅白歌合戦」（NHK）や「ミュージックステーション」（TV朝日）に出演することです。音楽番組に、車椅子や障害のあるアーティストが当たり前に登場する世界をつくりたいんです。

　また、表現の幅と深さを追求していきたいですね。私が歌いはじめたのは、障害のある人の存在を多くの人に知ってもらうためでした。でも、歌や表現の魅力にどんどん取りつかれ、いまでは表現することは生きることだと思っています。自分自身でもそれを体現したいし、多くの人が自分らしく生きるきっかけとして表現を使えるようにしたい。少しずつ、自分が学んできた歌やダンスを若い子に教えたり、学校を回ったり、一緒にステージに立ったり、といったことも始めています。変わりたいと思っている人に機会を提供したいですね。

栗栖　SLOW CIRCUS PROJECTではサーカスを使ったチームビルディング研修やダイバーシティ授業を展開していきたいと思っています。また、これまでは100人前後のプレイヤーが出演する大規模な公演が中心でしたが、3〜4人のプレイヤーで回すコンパクトで機動力の高い公演を作っていきたいですね。音楽や美術といった演出面もプレイヤーに考えてもらい、プロ意識を育もうという狙いです。

　大きな目標は、エンタメの景色を変えることです。さきほど小澤さんが話していたことにもつながりますが、たとえば学園ドラマのクラスメイトとして当たり前のように車椅子や聞こえない子が出てきてもいいですよね。それがエンタメの景色として当たり前になれば、日常でもそんな環境を違和感なく受け入れられるようになるのではないでしょうか。

鹿子澤　2021年、マーベルの映画『エターナルズ』に耳の聞こえないヒーローが登場しましたが、YouTubeの予告動画のコメント欄を見ると「多様性をアピールしたいのはわかるけど……」といった否定的なコメントが多くて、「あぁ、日本ではまだ障害者がエンタメに出ることはまだまだ特別なことなんだ」とがっかりしました。こうした状況を変えていくには、やっぱり自分のような当事者が発信することが必要なんでしょうね。その発信を見て、「私はね」「僕はね」と続く人が出てくるかもしれない。SNSやYouTubeなど手段はたくさんありますし、私自身も行動に移していこうと思います。

コミュニティを飛び越えて広く届ける力

森　TCFでは今後も障害のあるアーティストの方を中心に、パフォーマンス公演を全国各地で巡回するイベントや、東京都内でのコンサートを開催する予定です。みなさんがTCFのこれからに期待することはありますか？

小澤　多くの人にきっかけを与え続けてほしいです。パラリンピックはたくさんの方に見てもらえたけれど、それを特別なこと、一時のムーブメントで終わらせたくない。TCFでつながった人たちと新しいことに挑戦していきたいですし、そのネットワークづくりをサポートしていただけるとうれしいです。

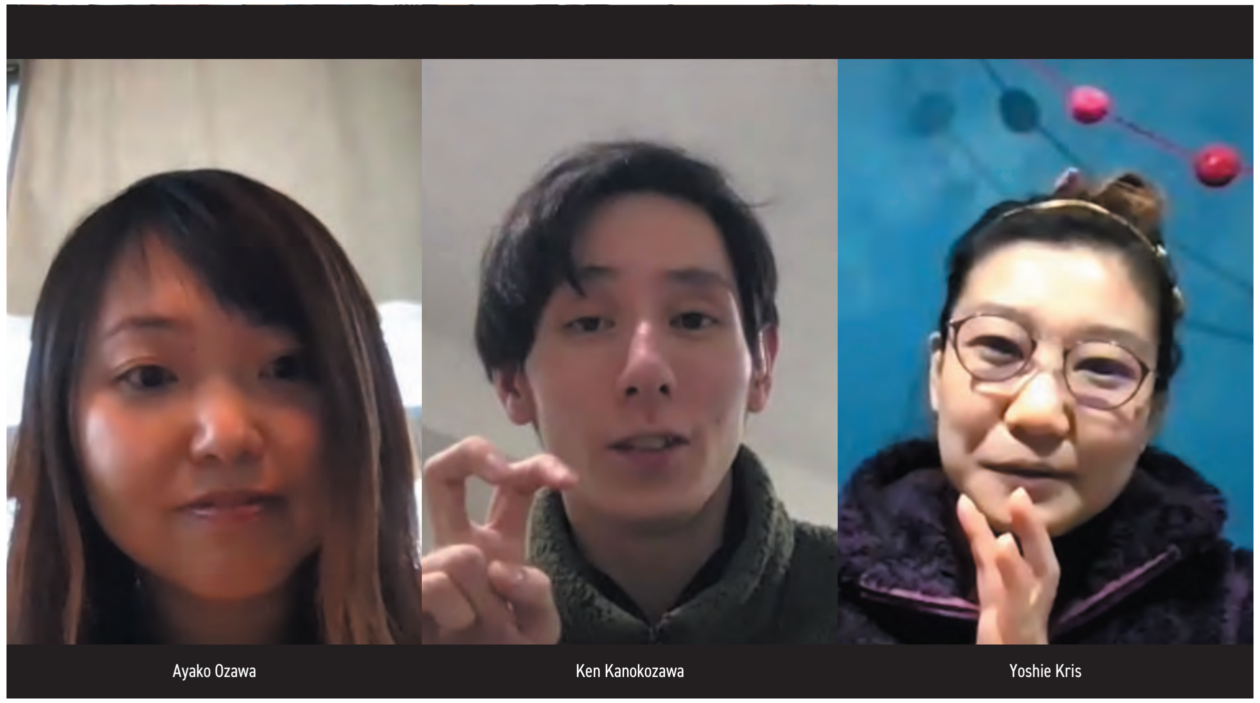
鹿子澤　聞こえない人のなかには、もっともっと世に出るべき、魅力ある手話表現をされる方がたくさんいます。まずTCFの関係者のみなさんにもそのことを知ってほしいです。ただ、せっかく魅力あるろう者のパフォーマーが、たとえば多様性をテーマとした企画に参加したとしても、手話通訳が入れないような舞台裏で、ちょっとした雑談から取り残されがちだったり、言語の違いから意思疎通がうまくいかなかったり……僕自身もこういった経験はありますし、こういったちょっとしたバリアは知らぬ間にストレスになっていたりします。さまざまな人が自分の力を100%発揮するためにはどういったことが必要なのか、もう一度みんなで考えられるといいのかなと思っています。

栗栖　全国各地の小中学校で講演をして「パラ開閉会式を見た人？」と呼びかけると、先生が2〜3人手を挙げる程度で、児童・生徒からはほとんど手が挙がりません。東京とそれ以外の地域では意識や関心に大きな差があると感じています。そこを変えるにはやっぱり、障害のない人たちが普段目にするテレビ番組等のプログラムに入り込んでいくことが必要なのではないでしょうか。TCFにはそうした機会をつくる力、これまでのコミュニティを飛び越えて広く届ける力があると信じていますし、これから先何ができるか、改めて一緒に考えていきたいですね。

森　みなさんのお話を聞いて、公演を開催するだけではなく、これまでの公演を通して見えてきた課題や展望をみんなで話し合うなど、点と点をつなげて線にしていくような動きが必要なのかもしれないと思いました。今後の展開の参考にさせていただきます。今日はありがとうございました。

＊座談会はオンラインにて実施
text｜飛田恵美子（言祝ぐ）　手話通訳｜岡田直樹、武井誠

True Colors CIRCUS エンディングのステージ風景（写真：冨田了平）



WHO SHALL I EXPRESS AS?

Mori To begin with, I'd like to look back on the history of TCF with everyone. Kris, you've been involved with the project since 2017.

Kris Yes, I got to first create a performance piece with people with disabilities in 2014 for Yokohama Paratriannele. It was shocking to see how small the population of Japanese performers with disabilities was and how behind we were in the infrastructures. I thought, the Olympic/Paralympic Games will be held in Japan but we could never match the London Games like this! I've worked hard trying to improve this situation, to make it a larger movement that repercussed throughout Japan.
Through that process, I got to meet everyone at the Nippon Foundation, and I planned the summer school program in 2018 to discover and nurture new performers [sponsored by the Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS]. I organized this program because I've always felt that there weren't enough human resources or methods in Japan to train performers with disabilities. From here, we scouted performers who stood out that led to True Colors JAZZ (hereafter JAZZ) and True Colors MUSICAL (hereafter MUSICAL). Ozawa, you took part in summer school, right?

Ozawa Yes, that was around the time I realized my desire to participate in Paralympics in some way, and joined the summer school to improve my skills. At first, I only thought about myself – I wanted to improve my singing – but our teacher Takashi Matsunaga taught us that we can collaborate our possibilities and create something completely new. This really broadened my view, and I began to think outside of my box, that perhaps I could produce something amazing and surprising by teaming with the people I met at the school.
Following the summer school was JAZZ, and it was so moving to create together with people from different countries with various languages and backgrounds. And I also felt that I had more to give. This program pushed me to pursue the path of music and expression. I may sound like I'm giving too much credit to the program [laughs] but it really had a huge impact on my life.

Mori Kanoken, we got to work with you from the True Colours Festival in Singapore in 2018 to MUSICAL, and True Colors CIRCUS (hereafter CIRCUS). Do you have any feelings and thoughts on the programs?

Kanokozawa I think I've been searching for myself ever since I began my journey as a performer. I first went on the stage as a person who can't hear. But there are times I'd communicate with others with hearing ability in vocalized Japanese, and when I wear a hearing aid I find myself searching for the tiniest sound. And I wondered many times, is such a person really a "person who can't hear"? It tormented me. Who was I supposed to express as? But through TCF, I got to meet such a diverse group of people, and I was blessed with many opportunities to be seen as myself, simply as a person, and I began to think that I can express as Kanoken, not as "someone who can't hear." This shift in my thinking is a huge treasure TCF gave me.

Mori Was there a particular moment that you reached that shift?

Kanokozawa When I visited America for the MUSICAL production, they asked me very directly, "Kanoken, how would you describe yourself?" They were asking for the degree of my hearing ability and the support I needed. I couldn't answer right away. Till then, it wasn't necessarily holding back but I had never really vocalized about myself, so I couldn't explain myself sufficiently. It was huge that I saw that side of myself. And when I honestly talked about myself, including that dilemma I had mentioned earlier as a "person who can't hear", they accepted it without any judgment, and I thought, so this is how it should be.

Mori The CIRCUS show was canceled following the state of emergency issued against the increasing COVID cases, but we were able to showcase the dress rehearsal.

Kris Yes, the CIRCUS performers were cast through an audition, so we got to discover new talents, and the audition also led to the formation of SLOW CIRCUS PROJECT, Japan's first social circus company. Canceling of the show was no doubt unfortunate but I was very glad that the dress rehearsal was at least put on. Without that, I don't know if the casts' motivation would have lasted. A public presentation brings the team together, and I realized how much the performers flourish with the audience's eyes.

Mori Many performers from the past TCF programs were seen in the opening and closing ceremonies of the Paralympics, we had so much joy watching the TV.

Kris When the original direction team got disbanded at the end of 2020, I had to make the difficult decision as well. But I wanted to send off the performers who I've discovered and nurtured for such a long time, and I knew how strong they and the people around us felt too, so I decided to stay on the team. I'm glad I powered through, the event was a great opportunity for the casts, both on stage and behind.

Kanokozawa I took part in the opening ceremony, in the <Story of a Small One-Winged Airplane> in the role of Chatty Airplane. At first, the role was named Calm Airplane but the way I speak in sign language is so jolly, the role name got changed [laughs]. On-site, I took what I learned from the past TCF programs and SLOW CIRCUS PROJECT and did my best to support others who weren't as familiar with a stage of this scale. I think if the casts are holding back, for not knowing each other well, then we all couldn't give our 100%. So I tried to have everyone to know each other and create a light atmosphere. It was a secret mission of mine.

Ozawa I was in the closing ceremony on the wheelchair drums. At first, I thought I'd embarrass myself for the world to see because I don't have a good rhythm and can't move my hands fast. But Kris advised me to find an expression that only I could do, and from that day I started practicing in front of a mirror and worked on moving my hands smoothly. Then, people complimented me like never before, told me it was cool! So I realized, I can only be myself in expression, just like in life. I hope to continue creating colorful scenes like that of the closing ceremony.

PEOPLE WITH DISABILITIES IN THE PRODUCTION TEAM

Mori TCF was created with 2020 in our minds, the year the Olympics and Paralympics were to be held. Do you think the environment that surrounds the people and performers with disabilities has changed with the Olympics and Paralympics?

Kris: Yes, with the Games a variety of cultural programs were launched, the legal landscape was expanded, and many performers have grown. However, it's far from the level that the US or UK are at, and the accessibilities at nongovernment theaters aren't at all sufficient. Besides, there isn't enough representation in mainstream entertainment such as films and television. I think they need to change for society to change.

Mori What do you think is missing?

Kris I think the production team — producers and directors — needs to have more people with disabilities, not just among the performers. If people without disabilities create from 1 to 9 then cast a person with disabilities just for the final 10, that's just painting a plausible picture. Diverse perspectives are needed from the basic planning for projects to make the best of expressions by those with disabilities.

Kanokozawa In recent years, we've seen an increase in events in which people with disabilities can participate, but I still see so much that needs to change. Sometimes I'd get invited to a theater production, but when I tell them that I need a sign language interpreter, they ask things like "do we need to arrange the interpreter? how much would they cost?" We must first gather up the information that comes with our necessities even to begin the negotiation. That workload we must undergo, just to stand at the same starting point as those without disabilities, isn't that discrepant from the "equality" the society holds up?
For example, if there was a list of necessary support which we can just tick, say, a sign language interpreter or a slope, for the production team to prepare, then we can focus solely on our performance.

Ozawa I do feel the infrastructure improved with the Games, like new elevators at train stations. I went to a concert the other day, and the venue had elevators, slopes, and barrier-free bathrooms, it was wonderful. However, I did notice that there wasn't a slope on the route to the stage. Maybe people with disabilities were counted in to visit as audiences, but not in the production team or performers.
It's also difficult for artists with disabilities to train our skills. Even if I want to improve my singing, there aren't many vocal training classes that I can frequent with a wheelchair. Or the teacher would tell me to grow muscles when my sickness doesn't allow me to increase muscles. It's difficult to find educators who understand our illnesses and disabilities. I hope these things can change as well.

Mori We also experience what Ozawa said about the venues, I think it resembles the society's perspective.

Kris I think it's wrong that the job options available for people with disabilities are either a Paralympian or a Type B Employment*. I want a society where people with disabilities can shoot to be an artist or a creator. I think we succeeded in planting a seed with the Paralympic ceremonies; there must be people out there who thought, hey maybe I can be on that stage too. I hope to show the next step, which is for people with disabilities to be on the production team, to be the ones who plan the presentation of shows.
To do so, we need the performers who have grown at TCF and those who participated in the Paralympic ceremonies to not be satisfied that they were able to find success as individuals. They need to speak and act for society and the next generation. What Kanoken and Ozawa would do in the next couple of years — it may sound like pressure, but that's where TCF's accomplishment lies.

*Type B Employment: Short for Governmental Support for Continuous Employment, Type B, is a welfare service where people with disabilities who feels uncertain or has trouble working at general companies can receive light-work job training without signing an employment contract.

Ozawa I agree that we were given special opportunities and that we must work for the next step. There are people with serious illnesses or disabilities who are giving their all just to survive, and I guess we are blessed that we can express ourselves. With those thoughts in my heart, I want to achieve an environment where people with disabilities can challenge what they choose, get properly paid, and live healthily.

Kanokozawa Whether it be a workshop or a performance piece, I'm ambitious in creating a project. I believe there must be a calling for me with my experience with various projects and emotions, like casting people with hearing impairment or creating a good work environment. Kris is always urging me, so I'm anxious to realize it soon.

OFFER OPPORTUNITIES TO THOSE WHO SEEK TO CHANGE

Mori Now that we are done with the Olympics and Paralympics Games, which was one of our milestones, what is on your mind next?

Ozawa My next immediate goal is to perform at the Kōhaku Uta Gassen [Red and White Song Battle] (NHK) and/or Music Station (TV Asahi). I want to see a world where it's normal for artists in wheelchairs or with disabilities to perform on mainstream music programs.
I also want to broaden my range and depth of expression. I began singing to show the world the existence of people with disabilities. But more and more I got fascinated with singing and expressing, and now I believe that expression is what living is. I want to share that with the world, and I also wish for as many people to learn how to express themselves as a way to live their true selves. Little by little, I'm starting to teach singing and dance to younger people, visiting schools, and sharing the same stage with them. I wish to offer opportunities to those who seek to change.

Kris At SLOW CIRCUS PROJECT, we are planning for team-building training and diversity classes by utilizing circus skills. Also, we have so far done large-scaled performances that consisted of about a hundred performers, but I'd like to create performances that are more compact and mobile, run by 3-4 performers. We'll have the performers plan the music and visual aspects of the show as well, to develop their professionalism.
My bigger goal is to change the horizon of entertainment. This relates to what Ozawa was saying, but it should be completely normal for kids in wheelchairs or with hearing impairment to appear in a school drama TV as classmate roles. If that becomes the norm in the entertainment media, I believe people will easily accept such situations in real life.

Kanokozawa In 2021, there was a Deaf hero in the Marvels film "Eternals", but I saw many negative comments to its trailer clip on YouTube, like "we get you want to be inclusive and all but —." I was so disappointed to see that it still is a rarity for people with disabilities to be represented in the entertainment media. To change this, I think we, the ones with disabilities, need to keep on speaking out. Someone may follow us and start speaking out as well. We have so many means to do so too, like the SNS platforms and YouTube, so I will start taking action as well.

STRENGTH TO TRANSMIT ACROSS COMMUNITIES

Mori TCF will continue to work with artists with disabilities to organize performances, national tours, and concerts in Tokyo. Are there any expectations you have for TCF?

Ozawa I wish TCF to continue giving opportunities to more people. Paralympic did gather a large audience, but I don't want it to end as something special, a passing movement. I will continue challenging new projects with the people I've connected with through TCF, and I hope you'd support our network building as well.

Kanokozawa In the hearing impaired community, there are still many undiscovered people with great sign language expressions. I'd love for you guys at TCF to get to know them. Also, there are times which I've experienced too, that even when a talented Deaf performer is cast on a diversity-themed project when a sign language interpreter can't be present, there are backstage moments when we are left out from small talks or experience difficulty from the language difference. These small barriers do happen, and they build up stress without us realizing it. I think we should come together to re-think what is needed to allow each person to shine to their fullest.

Kris I've lectured in numerous elementary and junior high schools around the country, and when I ask who's seen the Paralympics ceremonies, only 2 or 3 teachers would raise their hands, and almost none from the students. It feels there's a big difference in awareness and interest between Tokyo and other areas. To change that, I think we need to again get inside the mainstream media such as the TV programs that people without disabilities see day-to-day. I believe that TCF has the strength to build such opportunities and transmit across communities, and I wish everyone can come together and think about what we can do next.

Mori Hearing your insights, I thought perhaps we need to not only organize shows, but discuss the issues and prospects that we've learned through performances, and line all the dots as a team. I'll make good use of this idea in the future. Thank you.

*The roundtable discussion was held online.
Text: Emiko Hida (cotohogu)
Sign Language Interpreter: Naoki Okada, Makoto Takei

True Colors DIALOGUE
ママリアン・ダイビング・リフレックス／ダレン・オドネル「私がこれまでに体験したセックスのすべて」
True Colors DIALOGUE “All the Sex I’ve Ever Had” by Darren O’Donnell of Mammalian Diving Reflex

カナダ出身のアーティスト、ダレン・オドネルを中心とするママリアン・ダイビング・リフレックスの演劇作品。本公演では、2019年末から2020年初頭にかけて、公募で集まった60歳以上の出演者5人とダレン・オドネルらが1ヶ月間のワークショップとインタビューを行い、それぞれの性体験の歴史を振り返りながら、脚本を制作しました。本来であれば2020年3月に実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止。2021年4月に、演出家チームがオンライン参加するなど感染予防対策として内容を一部変更した上で公演を再開させ、コロナ禍での演出モデルの先例になりました。また、高齢者の性を取り扱った本公演は、出演者の多様な性のあり方やママリアンの挑戦的な演出方法などがSNSを中心に話題を集め、シニア世代の出演者と若い世代の観客の間での世代間交流も生み出しました。

This is a theater piece by Mammalian Diving Reflex, a group led by Canadian artist Darren O’Donnell. Darren O’Donnell and his team spent a month spanning from 2019 to 2020 to carry out workshops and interviews with 5 casts selected from public applications, all above 60 years of age, and wrote the screenplay based on the casts’ stories about their sexual history. The stage was originally to take place in March 2020 but was canceled due to the rapid spread of the COVID-19 disease. In April 2021 the performance was resumed, taking on partial modifications such as having the Director team participate online to meet the pandemic precautions, and became one of the leading production models in the pandemic era. This piece is themed on the sexuality of seniors, and the gender diversity of the casts as well as Mammalian’s ambitious direction of the piece had attracted attention on social network platforms, evolving into multi-generational conversations between the senior casts and younger audiences.

開催日時｜2021年4月8日（木）～4月11日（日）　開催場所｜スパイラルホール（港区南青山）

Dates: Thursday, April 8, 2021 - Sunday, April 11, 2021　Location: Spiral Hall (Minato Ward, Minami Aoyama)

鑑賞サポート｜日本語字幕／英語字幕、日英通訳、日本手話通訳、日本語音声ガイド機器貸出、車椅子席、補助犬利用、介助者一名無料、通路側席、最寄駅からのアクセス情報、最寄り駅からのご案内

Viewing Support: Japanese/English subtitles, Japanese/English interpretation, Japanese sign language interpretation, Japanese audio guide device available for rent, viewing spaces for wheelchairs, assistant dogs welcomed, free entrance for one carer, aisle seats available, access information from the nearest station provided, guidance from the nearest station provided

---

演出・脚本｜ママリアン・ダイビング・リフレックス／ダレン・オドネル

出演｜千葉、富山、兵庫、宮城、東京出身のシニア

サウンドデザイナー・司会｜入江陽

通訳・翻訳・字幕製作｜
Art Translators Collective（相磯展子、田村かのこ、水野響、山田カイル）

舞台手話通訳｜加藤裕子、橋本一郎、水野里香

音声ガイド｜彩木香里　企画・制作｜株式会社precog

来場者数｜472名（鑑賞サポート利用者数：車椅子席4名、手話の見やすい席30名、日本語音声ガイド貸出97名）

Director/Writer: Mammalian Diving Reflex / Darren O’Donnell

Casts: Seniors from Chiba, Toyama, Hyogo, Miyagi and Tokyo prefectures

Sound Designer/MC: Yo Irie

Translation/Interpretation and Subtitle Production: Art Translators Collective (Nobuko Aiso, Kanoko Tamura, Hibiki Mizuno, Kyle Yamada)

On-Stage Sign Language Interpretation: Yuko Kato, Ichiro Hashimoto, Rika Mizuno

Audio Guide Narration: Kaori Saiki

Project Plan/Production: precog co.,LTD.

Number of Visitors: 472 (Viewing Support Users: 4 wheelchair spaces, 30 seats providing a more accessible view of the sign language interpreter, 97 Japanese Audio Guide rentals)

公演の冒頭で、観客はこれから話されることを「絶対に口外しない」という誓いを立てた。

At the start of the show, the audience was asked to make an oath not to disclose the contents of the stage.

舞台上では、シニア５人が自身の言葉で、それぞれの性体験、半生について静かに語った。

On stage, 5 seniors solemnly spoke about their sexual history and personal life with their own words.

コロナで来日が叶わなかった演出・脚本のダレンも画面越しに登場し、観客に次々と質問を投げかけた。

Darren, who could not come to Japan due to the pandemic, took to the stage via screen and asked a number of questions to the audience.

Voice

ダレン・オドネル（演出・脚本、ママリアン・ダイビング・リフレックス）

手話通訳者や視覚障害者のための音声ガイド制作者との共同作業は非常に為になる経験でした。彼らの言葉や、異なったコミュニケーション方法が幾層にも重なり、観客とのより深い繋がりを産み出すことができたと思います。ろうの方たちに舞台の内容を伝え、そしてQ&Aへ参加していただけたことは、必要な情報保障が提供されただけでなく、舞台の美学的な美しさ、そしてインパクトをより強めたと思います。

Darren O’Donnell (Director and Writer from Mammalian Diving Reflex)

It was a great experience working with the team of signers and audio describers. Rather than detracting from the performance, the presence of all of the different layers of translation and communication made the project feel even more deeply connected to the community. Being able to accommodate Deaf people in the audience and in the Q&A didn’t just feel like the right thing for accessibility but an increase in the aesthetic beauty and impact of the work.

Voice

橋本一郎（舞台手話通訳）

（通訳の依頼を受けて）最初、内容を見たときに「無理でしょ」と思いました。手話というのは視覚言語なので、性的な言葉も動作として見せなきゃいけない。そんなのできないと思うじゃないですか。でも、時代は変わってきていて、出演者も含めていろいろな人がいるわけだから、そこからろうの人が外れちゃいけないなと思ったんです。ろうの人も見えない人もそういう場には絶対必要で、そういうチャンスをもらえたんだと割り切って参加することにしました。

<取材・文：山崎健太　precog note 記事『舞台手話通訳のクリエーションをひもとく』より>

Ichiro Hashimoto (On-Stage Sign Language Interpreter)

(When first asked to participate) I read the script and spontaneously thought “No way!” Sign language is a visual language so we must express all terms, including the sexual terms, as gestures. So you probably would understand why I initially thought I couldn’t take part. But the time is changing and seeing the diverse group of cast, I thought the deaf must not be left out. The deaf and the blind must be present in these places as well, so I moved on past my initial reaction and decided to participate, seeing it as an opportunity to represent.

<Interview/Text: Kenta Yamazaki, excerpt from precog note article “Unbinding the Creation of On-Stage Sign Language Interpretation”>

Ripple

上演機会を拡大し京都へ

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2021 SPRING

開催日時｜2021年3月26日（金）～3月28日（日）

開催場所｜京都芸術センター 講堂（京都市中京区）

来場者数｜290名

公演延期をきっかけに、本公演の京都公演が実現しました（主催：KYOTO EXPERIMENT）。KYOTO EXPERIMENTと連携しながら相互に宣伝協力を行い、関西方面の多くの方々にも演目をご覧いただくことができました。

Taking the Stage Opportunities in Kyoto

KYOTO EXPERIMENT Kyoto International Performing Arts Festival 2021 SPRING

Dates: Friday, March 26, 2021 - Sunday, March 28, 2021

Location: Kyoto Art Center Auditorium (Chukyo Ward, Kyoto City)

Number of Visitors: 290

The postponement of the project gave us a chance to take the piece to Kyoto, hosted by KYOTO EXPERIMENT. We worked along with KYOTO EXPERIMENT to promote and the event was greatly appreciated by many audiences from the Kansai area.

True Colors CIRCUS SLOW CIRCUS PROJECT
「T∞KY∞～虫のいい話～」“T∞KY∞ - Too Good to be a Bug”

SLOW CIRCUS PROJECTによる、障害の有無・年齢を超えて集まったパフォーマーによる野外サーカス公演。「アカンパニスト」や「アクセスコーディネーター」など、様々な人が同じ舞台に立つための スローレーベル独自の仕組み作り、役割分担を持ち味にして、総勢44名のパフォーマーが演目に集いました。緊急事態宣言によって公演は急遽中止となりましたが、2021年6月には関係者を招いたゲネプロ（通しリハーサル）の様子を収めた映像全編の無料配信を開始しました。クリエイティブプロデューサーの栗栖良依をはじめ、制作チームや多くのパフォーマーは、同年8月に行われた東京2020パラリンピック開閉会式にも出演し、活躍の場が広がっています。

Created by the SLOW CIRCUS PROJECT, this is an outdoor circus show performed by differently abled casts of various age groups. The Slow Label applies their twist on structural formation and creates original positions such as “Accompanists” and “Access Coordinators” for a diverse group of people to share a stage, and, in this case, brought 44 casts to perform together. The government's declaration of the state of emergency had abruptly aborted the performance, but the complete documentation of the dress rehearsal with invited participants was uploaded for free streaming in June 2021. Many of the casts and the production team, including Creative Producer Yoshie Kris, were invited to perform in the opening and closing ceremonies of the Tokyo 2020 Paralympics Games held in August 2021, and are continuing to expand their stages to shine.

かおりが、苦手な高所から飛び降りるのを全員で励まし、待ち構える。
Everyone cheers on as Kaori gets ready to jump from – literally – her fear of height.

障害のある人もない人も、出演者全員がテーマソングに合わせて一堂にダンスした。
The whole cast, with and without disabilities, dance together to the theme song.

開催日時｜2021年4月24日（土）※公開ゲネプロ
※4月25日（日）26日（月）に予定していた本番は、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の発出により中止
開催場所｜池袋西口公園野外劇場（東京都豊島区）/ オンライン

関連動画／Related Video Links

Dates: **Saturday, April 24, 2021 *Open Dress Rehearsal**
*The April 25th and 26th shows were canceled following the government's declaration of state of emergency against COVID-19.
Location: **Ikebukuro Nishiguchi Park GLOBAL RING THEATER (Toshima Ward, Tokyo) / Online**

鑑賞サポート｜多言語字幕（日本語・英語・中国語・韓国語・フランス語・スペイン語）、日本手話通訳、日本語音声ガイド、Ontenna貸出、車椅子席、補助犬利用、通路側席、最寄駅からのアクセス情報
Viewing Support: Multilingual Subtitles (Japanese, English, Chinese, Korean, French, and Spanish), Japanese sign language interpretation, Japanese audio guide, “Ontenna” available for rent, viewing spaces for wheelchairs, assistant dogs welcomed, free entrance for one carer, aisle seats available, access information from the nearest station provided

---

クリエイティブプロデュース｜栗栖良依　構成・演出｜金井ケイスケ
文芸・音声ガイド｜益山貴司　振付｜井手茂太
衣装・デザイン｜矢内原充志　音楽｜川瀬浩介
出演｜
アカンパニスト／鈴木彩華、鹿子澤拳、東野寛子、高橋徹、定行夏海、桧山宏子
サーカスチーム／神本恵里、和田海秀、小川香織、山本栞、徳川亮祐、吉中全力、めぐみ梨華、こんどうりえ、猪野礼和、五十嵐謙、高島尚義、齊藤望、かんばらけんた、三宅まり、久保田葉月、中村大輝、榎本トオル、井谷優太
アンサンブルリーダー／SOCIAL WORKEEERZ（TOMOYA、YU-Ri、NAGA、HEIDI、宇山あゆみ）
アンサンブル／石川大貴、井上めぐみ、猪瀬早紀子、芝田勝彦、清水瑚都、武内美津子、千葉昇司、深沢尚子、本田正、三浦美友紀、山本総来、山本芙沙子、若林紀美江、MiCHi
制作｜NPO法人スローレーベル
来場者数｜285名（鑑賞サポート利用者数／車椅子席6名、手話の見やすい席7名、Ontenna貸出3名、通路側席14名 他）
視聴者数｜6,661回（Youtube 2,567回、スローレーベルYoutube 4,094回）

Creative Producer: Yoshie Kris　Editor/Director: Keisuke Kanai
Script Writer/Audio Guide: Takashi Masuyama　Choreographer: Shigehiro Ide
Costume Designer/Creator: Mitsushi Yanaihara　Music Director: Kohsuke Kawase
Casts: Accompanists/ Ayaka Suzuki, Ken Kanokozawa, Hiroko Higashino, Toru Takahashi, Natsumi Sadayuki, Hiroko Hiyama
Circus Team/ Eri Kamimoto, Kaishu Wada, Kaori Ogawa, Shiori Yamamoto, Ryosuke Tokugawa, Chikara Yoshinaka, Megumi Rika, Rie Kondo, Hirokazu Ino, Ken Igarashi, Hisayoshi Takashima, Nozomi Saito, Kenta Kambara, Mari Miyake, Hazuki Kubota, Hiroki Nakamura, Toru Enomoto, Yuta Itani
Ensemble Leaders/ SOCIAL WORKEEERZ (TOMOYA, YU-Ri, NAGA, HEIDI, Ayumi Uyama)
Ensemble/ Daiki Ishikawa, Megumi Inoue, Sakiko Inose, Katsuhiko Shibata, Koto Shimizu, Mitsuko Takenouchi, Shoji Chiba, Naoko Fukazawa, Tadashi Honda, Miyuki Miura, Fusaki Yamamoto, Fusako Yamamoto, Kimie Wakabayashi, MiCHi
Production: Nonprofit Corporation Slow Label
Number of Visitors:
285 (Viewing Support Users: 6 wheelchair spaces, 7 seats providing easier view of the sign language interpreter, 3 “Ontenna” rentals, 16 aisle seats, etc.)
Number of Online Viewer: 6,661 views (Youtube: 2,567, Slow Label Youtube: 4,094)

Voice

出演パフォーマーの介助者

コロナ禍での練習が事務局の皆さんの配慮で安全に行われたこと、本当に感謝しています。特にリスクが高い重症心身障害者は練習の回数も少なくしてもらいました。ゲネプロに初めて参加した後、目が3倍位大きく見開いて戻ってきたのを見て、きっとすごい景色を見てきたんだなあと感動しました。出演者の皆さんとお話したり、何気ないやりとりがとても幸せそうで、参加してこそ得られる豊かな気持ちを持てたと思います。

Cast Carer

I'm so grateful for the team's careful attention to carry out the rehearsals safely in this unprecedented pandemic. Rehearsal days were cut down especially for those with profound intellectual and multiple disabilities. After their first dress rehearsal, they came back with eyes opened 3 times wider than usual and it moved me to imagine the astounding experience they must have had. I can tell their happiness in the way they communicate and in the smallest exchanges they have with other casts, and I believe they found an abundance of emotions through participating in the piece.

Voice

ゲネプロ鑑賞者（アンケートより抜粋）

プラットキャスト（音声配信サービスによる音声ガイド）が障害のない私の視覚にもとても役立ちました。ひと昔前は、障害者を見世物にするなんて…といった空気がありましたが、障害のある人の創るモノが世に必要な時代が来ました。今後も楽しみにしています。

Dress Rehearsal Audience (Excerpt from a Questionnaire)

PlatCast (audio guide provided by an audio distribution service) was very useful even for my eyesight without a disability. Back in the days, there was an air of reproach when people with disabilities were “exposed” for a show, but we now have come to a world where the creation by those with disabilities are truly needed. I'm looking forward to seeing your future productions.

Ripple

ソーシャルプログラムとして世界へ

SLOW CIRCUS SCHOOL
-The WORLD- tookyoo スペシャルversion
開催日時｜2021年4月3日（土）
開催場所｜オンライン
参加者数｜約20名

スローレーベルが主催する若者に向けた社会参加支援プログラム「SLOW CIRCUS SCHOOL」では、金井ケイスケ、鈴木彩華によるサーカスワークショップが行われました。本公演に出演予定だったカナダ在住の両足義足のサーカスアーティスト、エリン・ボールさんも特別ゲストとして参加。当日はアメリカ、イギリス、フランス、コロンビア、インド、シンガポールなど海外からの参加もありました。リアルタイムで日英字幕の表示も行い、障害、言語、国境を超えて誰もが心を通わせながら身体を動かすワークショップとなりました。

Into the World, as Creative Social Programs

SLOW CIRCUS SCHOOL -The WORLD- tookyoo Special Version
Date: Saturday, April 3, 2021
Location: Online
Number of Participants: Approximately 20

A social participation support program “SLOW CIRCUS SCHOOL” was held for the youth hosted by Slow Label, in which Keisuke Kanai and Ayaka Suzuki organized a circus workshop. Canada-based Erin Ball, a circus artist with prosthetic legs, who was originally to take part in the show also appeared as a special guest. Viewers joined them from all around the globe – America, England, France, Columbia, India, and Singapore. Realtime Japanese and English subtitles were shown, and the workshop provided refreshing physical activities crossing over disabilities, languages and countries.

True Colors FASHION
「身体の多様性を未来に放つダイバーシティ・ファッションショー」
True Colors FASHION <The Future is Now!>

メディアアーティストの落合陽一を総合演出に迎え、11組のモデル（以下、M）・テック企業（以下、T）・ファッションブランド（以下、F）がタッグを組んで作品を制作し、ランウェイを練り歩くファッションショーを収録・配信しました。モデルの多様な身体を起点にして、それぞれの身体性に寄りそうテクノロジーにファッションデザインの視点を盛り込んで拡張。11組の制作チームそれぞれへのインタビュー映像も公開し、制作プロセスを紹介しています。

We've welcomed media artist Yoichi Ochiai as the creative director to film an online fashion show in which 11 teams of models (hereafter M), technology companies (T), and fashion brands (F) collaborated in the creation of fashion pieces to strut the runway. Taking inspiration from the models' diverse physicality, each piece was expanded with technology that recognized each body while maintaining the design point of view. We have also documented interviews with the 11 teams and shared their production process with the public.

開催日時｜2021年5月30日（日）～　開催場所｜オンライン

Release Date: **Sunday, May 30, 2021 -**　Location: **Online**

関連動画／Related Video Links

鑑賞サポート｜日本語字幕/英語字幕、日本手話　Viewing Support: Japanese/English subtitles, Japanese sign language

総合ディレクター｜落合陽一
音楽｜ケンモチヒデフミ　映像ディレクション｜bird and insect
ファッションディレクター｜山口壮大
プロデューサー｜金森香（一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL）
視聴者数｜541,739回（Youtube 541,654回、THEATRE for ALL 85回）

Creative Director: Yoichi Ochiai　Score Composer: Kenmochi Hidefumi
Film Director: bird and insect　Fashion Director: Souta Yamaguchi
Producer: Kao Kanamori (N.P.O. DRIFTERS INTERNATIONAL)
Number of Viewers: 541,739 views (Youtube: 541,654, THEATRE for ALL: 85)

Voice

山口壮大（ファッションディレクター）

従来のファッション業界はビジネスが前提なので、障害のある方々に向けて衣服を制作し、当事者の為の美学を可視化する試みは前例が思い当たらないほど稀有な試みだと思います。今回の事例を通して、当事者個人はもちろん、デザイナー単体でも中々気付けなかった作り手/受け手の需要が可視化されたように感じています。その需要が社会に馴染む「価値」としてビジネスに繋がるところに伝播するまで、こういった試みの灯火を絶やさず継続できれば、移り変わりの早いファッション業界で一時の流行り廃りではない取り組みとして、より意義が大きくなるのではとも思っています。

Souta Yamaguchi (Fashion Director)

The conventional fashion industry is grounded on business, so this project of creating garments intended for those with disabilities, to realize their aesthetic, is an attempt so rare I've never heard of a similar project before us. I think through this project, the demands from the maker/user that were difficult to be recognized even by those with disabilities or the designers were finally shone light on. If we can continue these projects not just as a passing trend but until those demands produce "value", seeped well within society to the point that it creates business, then I'm sure these projects will bring more meaning to the rapidly-changing fashion industry.

①Blade for All（T）×義足のキッズランナー（M）×無印良品（F）
Blade for Allは義足メーカーXiborgによる、障害のあるなし関係なく、楽しく一緒に走る風景が当たり前になることを目指すプロジェクト。モデルはユーザーの子どもたちが務め、「無印良品」を着用。
(1) Blade for All (T) x Young Runners with Prosthetic Legs (M) x MUJI (F)
Blade for All is a project by prosthetic leg maker Xiborg aiming for normality where people can run alongside regardless of their abilities. Young prosthetic leg users were appointed as models, wearing outfits by MUJI.

②Mission ARM Japan（M）xHATRA（F）
腕がないことを「不在」と捉えないトレンチコート。デザイン性を重視しながら、紐を引くと袖をまくれる機能や、端がマグネットになったファスナーなど、生活課題を解決するための多くのアイデアが詰め込まれた。
(2)Mission ARM Japan (M) x HATRA (F)
Trench coats that don't deem not having an arm as "missing." While focusing on its design value, many ideas such as string-controlled sleeves and zippers finished with magnet ends were incorporated to solve daily challenges.

③OTOTAKE PROJECT（T）×乙武洋匡（M）×やまと/KORI-SHOW PROJECT（F）
乙武さんをモデルにした呉服。車椅子時も義足歩行時も、丈を羽織丈から着物丈にアジャストすることで和装のシルエットを保ったまま着用可能。
(3) OTOTAKE PROJECT (T) x Hirotada Ototake (M) x YAMATO / KORI-SHOW PROJECT (F)
A kimono modeled on Hirotada Ototake. The length can be adjusted from the full kimono-length to thigh-high haori-length to maintain its Japanese-style silhouette when worn in a wheelchair or while standing with prosthetic legs.

④妊婦体験ベルト（T）×ryuchell（M）×MIKAGE SHIN（F）
ジェンダーレスなデザインを提案するMIKAGE SHINによるワンピースを、妊娠体験ベルトを装着したryuchellさんが着用。
(4) Pregnancy-Imitating Belts (T) x ryuchell (M) x MKIAGE SHIN (F)
ryuchell wears a one-piece dress designed by MIKAGE SHIN, a brand proposing genderless fashion designs, over a pregnancy-imitating belt.

⑤Ontenna（T）×Pippi（M）×ANREALAGE（F）
音の特徴を振動と光でユーザーに伝える装置Ontennaを、ANREALAGEが光ファイバーを用いた糸で装飾。
(5) Ontenna (T) x Pippi (M) x ANREALAGE (F)
ANREALAGE used thread utilizing optic fibers to decorate Ontenna, a device that transmits sonic characteristics to the user via vibration and light.

⑥OTON GLASS（T）×濱ノ上文哉（M）×beta post（F）
読み上げ機能のあるメガネOTON GLASSとのコラボで生まれた、像が二重に重なるプリントデザインのリバーシブルコート。
(6) OTON GLASS (T) x Fumiya Hamanoue (M) x beta post (F)
A reversible coat designed with overlapping images, created in collaboration with OTON GLASS, eyeglasses equipped with a read-aloud function.

⑦Live Jacket（T） ×GenGen（M）×KANSAI YAMAMOTO（F）
Live Jacketによって音楽を振動で感じて踊るGenGenさんの軌跡を、視覚的に増幅させるKANSAI YAMAMOTOデザインのジャケット。
(7) Live Jacket (T) x GenGen (M) x KANSAI YAMAMOTO (F)
The vibration of the Live Jacket transmits music to Deaf dancer GenGen, while KANSAI YAMAMOTO jacket visually expands his movement.

⑧ALS SAVE VOICE PROJECT（T）×武藤将胤（M）×01 BORDERLESS WEAR（F）
ファッション性と着せやすさの両立を図る01 BORDERLESS WEAR。プロデューサーの武藤さんは視線入力読み上げ装置を使い、自身の声でコミュニケーションを続ける。
(8) ALS SAVE VOICE PROJECT (T) x MASATANE MUTO (M) x 01 BORDERLESS WEAR (F)
01 BORDERLESS WEAR aspires to create garments that are well balanced in both fashionability and wearability. Producer Masatane Muto maintains to communicate with his own voice using an eye-gaze input read-aloud device.

⑨WHILL（T）×我妻マリ（M）×ヴィンテージファッション（F）
70歳を超えた現在も現役のモデル我妻さんと次世代型電動車椅子WHILLのコラボ。
(9) WHILL (T) x Mari Azuma (M) x Vintage Fashion (F)
Mari Azuma, an active model in her seventies, collaborates with next-generation electric wheelchair maker WHILL.

⑩GIMICO・あべけん太・栗原 慎子・益ノ進（M）×TOMMY HILFIGER ADAPTIVE（F）
アダティブファッションの先駆的存在であるTOMMY HILFIGER ADAPTIVEを、義足モデル、ダウン症Youtuber、難治性てんかんの子供、義手の社会人が着用。
(10) GIMICO / Kenta Abe / Noriko Kurihara / Susumu Masuno (M) x TOMMY HILFIGER ADAPTIVE (F)
Prosthetic leg model, YouTuber with Down Syndrome, a child with intractable epilepsy, and a prosthetic hand user wears TOMMY HILFIGER ADAPTIVE, a trailblazer in adaptive fashion.

⑪ここね（M）×kotohayokozawa（F）
身の回りにあるものを組み合わせるkotohayokozawaのものづくりと、ここねさんの母による車椅子の装飾を組み合わせたブリコラージュ作品。
(11) Kokone (M) x kotohayokozawa (F)
A bricolage piece made in collaboration by kotohayokozawa, an artisan who builds with common objects, and Kokone's mother who had decorated the wheelchair.

＊(T)テック企業、(M)モデル、(F)ファッションブランド／(T)technology company (M)model (F)fashion brand

Ripple

多様性の視点を未来のファッションへ

開催日時｜2021年10月～2022年2月
開催場所｜文化服装学院（10月）、女子美術大学（11月）
　　　　　京都精華大学（2月）
登壇者｜金森 香、山口壮大、矢嶋孝行（株式会社やまと）、ちびもえこ、他
参加者数｜約600名（オンライン、オフライン含む）

True Colors FASHIONの映像作品をファッションや美術に関心のある学生に向けて公開、関連する講義・トーク等を実施することで、学生や若者と多様性について考える機会を創出しました。映像は他に東華大学（上海）でも教材としても活用されました。

Diverse Viewpoints to Future Fashion

Date: October 2021 - February 2022
Location: Bunka Fashion College (October), Joshibi University of Art and Design (November), Kyoto Seika University (February)
Speakers: Kao Kanemori, Souta Yamaguchi, Takayuki Yajima (Yamato Co., Ltd.), chibiMOEKO, and others
Number of Participants: Approximately 600 views (Online and offline total)

True Colors FASHION films were shown to students involved in fashion and art, followed by lectures and seminars in relation to the topic to bring opportunities for students and youth to think about diversity. The films were also used at Donghua University (Shanghai) as teaching material.

ミュージックビデオ「You Gotta Be」
Music Video <You Gotta Be>

「You Gotta Be」は、ロンドン出身のデズリーさんが1994年にリリースした世界的ヒット曲。True Colors Festivalではコロナ禍による不安が長期化する中で、世界で活躍する障害のあるアーティストたちがこの楽曲で共演し、未来への希望を持って日常をひたむきに生きる尊さをうたったミュージックビデオを制作しました。

参加したのは、米国のコンペティション番組「アメリカズ・ゴット・タレント」でファイナルまで勝ち残ったろうのマンディ・ハーヴェイさん、グラミー賞に2度ノミネートされた盲目のラウル・ミドンさんなど9カ国13名。シンガポールの音楽ディレクターシドニー・タンさん指揮のもと、オンラインでのやり取りや撮影を何度も繰り返して完成したMVは、Youtubeで公開中。アーティストのリモートアンサンブルを、世界各地のコロナ禍での、それぞれの日常の映像とともにお楽しみいただけます。

"You Gotta Be" is a global hit song released in 1994 by London artist Des'ree. As the pandemic continued to manifest restlessness worldwide, True Colors Festival asked artists with disabilities across borders to come together to create a music video to tell the importance of living our daily lives with hopes for the future.

Among the 13 talents from 9 countries, we have the likes of Mandy Harvey, the runner-up for the American competition program <America's Got Talent>, and Raul Midón, a 2 time Grammy nominee. The music video was created by trial and error of online calls and filming under the direction of Singapore-based Music Director, Sydney Tan, and is now available on YouTube. The artists' remote ensemble can be enjoyed with a peek into their day-to-day life under the global pandemic.

公開日 | 2021年6月14日(月)～　場所 | オンライン

Release Date: Monday, June 14, 2021 -　Location: Online

関連動画／Related Video Links

鑑賞サポート | 日本語・英語字幕、国際手話、英語音声ガイド　Viewing Support: Japanese/English subtitles, International Sign, English audio guide

音楽・総合監督 | シドニー・タン　映像監督 | ジャスパー・タン

音楽制作・編曲 | シドニー・タン、ジョシュア・ワン　音声ガイド台本 | ケン・チュウ

視聴者数 | 1,644,580回 (Youtube)

Music/Creative Director: Sydney Tan　Film Director: Jasper Tan

Music Producer/Arranger: Sydney Tan, Joshua Wan　Audio Guide Script Writer: Ken Chua

Number of Viewers:1,644,580views (Youtube)

Voice

デズリー(オリジナル曲「You Gotta Be」シンガー)

このミュージックビデオは、本当に心を動かすものですね。彼らの演奏は観る人に元気を与え、活力を満たし、この歌に込めた情感とメッセージをより高めています。また、最後のアーティスト紹介は、彼らの演奏にさらなる深みを与えており、素晴らしいです。

Des'ree (original recording artist of You Gotta Be)

This is a truly powerful video - so invigorating and energizing, elevating the sentiment of the song and its message. The artists' introductions at the end add even deeper resonance to their already inspiring performances.

ジョナタ・バストス(ブラジル) Johnatha Bastos (Brazil)
紀平凱成(キヒラ・カイル / 日本) Kyle Kihira (Japan)
ウィールスミス(シンガポール) Wheelsmith (Singapore)
エノス・アラウホ・バルボサ(ブラジル) Enos Araújo Barbosa (Brazil)
サインマーク(フィンランド) Signmark (Finland)
アルヴィン・ロウ(カナダ) Alvin Law (Canada)
アリエネット・コールドファイア(フィリピン) Alienette Coldfire (Philippines)
ラウル・ミドン(アメリカ) Raul Midón (US)
かんばらけんた(日本) Kenta Kambara (Japan)
The Shalva Band(シャルヴァ・バンド / イスラエル) The Shalva Band (Israel)
マンディ・ハーヴェイ(アメリカ) Mandy Harvey (US)
クリス・フォンセカ(イギリス) Chris Fonseca (UK)

Ripple

世界の子どもたちに考える機会を

「You Gotta Be」の中で輝く障害のあるアーティストたちの姿を子どもたちに伝え、学校等でのダイバーシティ教育に活用しようという動きも起こっています。2021年9月、TCFシンガポールチームとデリーのNGOが協働で企画し、地域の学校教員向けに「You Gotta Be」を活用したパイロット版教育プログラムを実施しました。2022年度にはこれを受けて、各国の教育機関と連携し、本作品を活用したアウトリーチプログラムが本格始動される予定です。

A Chance to Think with Children Worldwide

There have been opportunities to utilize <You Gotta Be> as teaching material to educate the youth and children of diversity through the impactful performance of artists with disabilities. In September 2021, TCF Singapore Team and Delhi's NGO have co-planned and implemented a trial education program that utilized <You Gotta Be>. Following this trial, a full-fledged outreach program with this video is scheduled to be implemented in 2022 in cooperation with educational institutions from various countries.

Voice

オードリー・ペレラ (True Colors Festivalエグゼクティブプロデューサー)

私たちは長年、「One World One Family(世界は一つの家族)」というメッセージのもとTCFを作り上げていて、アウトリーチ・プログラムもこの考え方の延長線上にあります。このプログラムでは、(これまでTCFで行ってきた作品鑑賞のような)パワフルだけれども瞬間的な体験ともまた違い、若い世代の人々がより深いレベルで関わり、つながり、ダイバーシティ&インクルージョンについて対話を深める機会を提供します。このような体験は、社会に変革をもたらすきっかけとなるといわれています。「世界の歴史は若者によって変わる」と日本財団笹川陽平会長が言うように、社会を変えるには、まず個人が変わらなければなりません。このような考えから、これからの社会をつくる若い世代へ向けてのアウトリーチプログラムに取り組んでいます。

Audrey Perera(True Colors Festival Executive Producer)

The TCF Schools Outreach program is a logical extension of our long-running performing arts programs which are designed around the message One World, One Family. It seeks to provide a way to engage on a deeper level with young people; to move from powerful yet brief experiences to a deeper level of engagement, connection and conversation about diversity and inclusion. Such experiences have been proven to be transformative and to inspire change. Inspired by the recent words of Yohei Sasakawa, Chairman of The Nippon Foundation –"The history of the world is changed by young people." – we realize that in order for society to change, individuals must change first. It is logical to focus this outreach program on young people who will shape tomorrow's societal attitudes.

TRUE COLORS FILM FESTIVAL 2021

コロナ禍での取り組みとして、2020年度にスタートした無料のオンライン映画祭TRUE COLORS FILM FESTIVAL（以下、TCFF）の第二弾。2021年度のテーマは「視点」とし、変化と共にあるこの時代に、作品を通して違和感と向き合い、これまで良しとしてきた物事を問い直す機会となることを目指しました。プログラムは、6才の少女が手話を学ぶことで新しい世界への扉を開く「The Silent Child」、ろうの写真家・齋藤陽道のドキュメンタリー「うたのはじまり」など、長編・短編を合わせて12カ国から集まった31作品。長編作品はシンガポールの映画配信サービス「Projector Plus」を、短編作品はフェスティバルの公式Vimeoチャンネルを通じて配信したほか、より幅広い層に向けて取り組みを伝えるため、イギリスの映画配信プラットフォームFilmbankmediaを通じ、「Zootopia」「Nomadland」の特別上映も行いました。

This is the second implementation of the free online film festival, TRUE COLORS FILM FESTIVAL (hereafter TCFF) which started in the fiscal year of 2020 as an event under the COVID-19 pandemic. The theme for the fiscal year of 2021 was <Perspectives>, and in the changing times, we aimed to showcase opportunities to face uneasiness through the films to re-question the norm that has been accepted until today. The program consisted of 31 short and feature films from 12 countries, such as [The Silent Child] in which a 6-year-old girl opens new doors through learning sign language, and [Uta no Hajimari], a documentary of a Deaf photographer Harumichi Saito. The feature films were streamed through [Projector Plus], a film streaming service based in Singapore while the short films were streamed on TCFF's official Vimeo channel, and to reach a wider audience, we had also streamed [Zootopia] and [Nomadland] through English film streaming service [Filmbankmedia].

公開日｜2021年12月3日（金）～12月12日（日）　場所｜オンライン

Release Date: Friday, December 3, 2021 - Sunday, December 12, 2021　Location: Online

鑑賞サポート｜日本語（一部除く）／英語字幕、日本語／英語音声ガイド（「Feeling Through」）

Viewing Support: Japanese (with exceptions)/English subtitles, Japanese/English audio guide ([Feeling Through])

エグゼクティブ・プロデューサー｜オードリー・ペレラ
制作｜テオ・スエレン、サリナ・サハリ
制作（日本）｜佐々木紀子、浦谷晃代　予告映像制作｜アンドレ・チョン
総視聴者数｜23,905回　総視聴国数｜71か国

Executive Producer: Audrey Perera
Producers: Teo Swee Leng, Sarina Sahari
Producers (Japan): Noriko Sasaki, Akiyo Uratani　Trailer Producer: Andre Chong
Total Number of Viewers: 23,905 views　Total Number of Viewing Countries: 71 countries

Ripple

日本語版音声ガイドを制作

「Feeling Through」（アメリカ/2021/18分/監督：ダグ・ローランド）

「Feeling Through」は、盲ろう者を主役に起用した世界初の映画です。TCFFでは視覚障害者、盲ろう者、聴覚障害者に向けた鑑賞サポートとして、英語版の音声ガイドを参考にしながら、オリジナルの日本語音声ガイド版と日本語スクリプト（劇中のセリフと状況説明をテキスト化したもの）を制作・配信。多くの方に音声ガイドの存在を伝える機会にもなりました。

音声ガイド出演｜石神哲朗、鈴木太二、小寺翔大
ディスクライバー・ナレーター｜彩木香里
スクリプト監修｜特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

Production of Japanese Audio Guide

[Feeling Through] (USA / 2021 / 18 minutes / Director: Doug Roland)

[Feeling Through] is the first-ever film to appoint a deaf-blind person as the main character. Referencing the English version, TCFF has created and streamed original Japanese versions of the audio guide and script (text containing characters' lines and situation descriptions) to provide viewing support for sight and/or hearing-impaired and deaf-blind people. It was a great opportunity to let the audience know about the audio guide as well.

Audio Guide Cast: Tetsurou Ishigami, Taiji Suzuki, Shota Kodera
Describer/Narrator: Kahori Saiki
Script Supervision: NPO Theater Accessibility network (TA-net)

TCFF2021『コーダ あいのうた』特別先行試写とトーク
TCFF2021 [CODA] Special Sneak Preview and a Talk

TCFF2021の関連イベントとして2022年1月、ろう者の家族の中でコーダ（聴覚障害者の親を持つ子供）として生まれ、歌うことを夢見た主人公の一家の愛と勇気を描いた映画「コーダ あいのうた」の日本語バリアフリー字幕版の特別先行試写会を行いました。SDGs の世界実現を目指して活動する学生団体・東京大学 UNiTe との共同企画として、同作にASL（アメリカ手話）監督 として参加し、聴覚に障害があり、俳優でダンサー、教育者でもあるアレクサンドリア・ウェイルズへの学生による事前インタビュー映像の公開のほか、ゲストとのアフタートークも実施。来場者の約3分の1が手話の見やすい席を希望し、幕間に手話で感想を話し合う賑やかな様子も見られました。

As a TCFF2021 related event, in January 2022, we had organized a special sneak preview of a Japanese barrier-free subtitled version of [CODA], a film depicting family love and bravery in which the main character born as a CODA (Child Of Deaf Adult) pursues her dream of singing. Co-planed with Tokyo University's UNiTe, a student organization working for the global realization of SDGs, we had welcomed Alexandria Wailes, the film's ASL (American Sign Language) Director with hearing impairment as well as an actor, dancer, and educator, for a pre-recorded interview clip documented by the students, and held an after-talk show with other invited guests. About one-third of the visitors had requested seats with an easier view of the sign language interpreter and lively sign language conversations were seen during intermissions.

『コーダ あいのうた』アメリカ｜2021年｜112分｜PG-12　配給｜ギャガ　GAGA★© 2020 VENDOME PICTURES LLC, PATHE FILMS
[CODA] USA / 2021 / 112 minutes / PG-12　Distribution: GAGA★© 2020 VENDOME PICTURES LLC, PATHE FILMS

公開日｜2022年1月14日（金）　場所｜スペースFS汐留（港区東新橋）

Release Date: Friday, January 14, 2022　Location: Space FS Shiodome (Higashishinbashi, Minato Ward)

鑑賞サポート｜日本語バリアフリー字幕（上映）、日本手話・日本語字幕（トーク）、車椅子席

Viewing Support: Japanese barrier-free subtitles (film), Japanese sign language/subtitles (talk show), wheelchair designated spaces

企画｜東京大学UNiTe EMPOWER Project
出演｜遥海（シンガーソングライター）、川俣郁美（日本財団）、菅田利佳（UNiTe）、アレクサンドリア・ウェイルズ（『コーダ あいのうた』アメリカ手話監督）＊映像出演
進行｜飯山智史・佐々俊之（UNiTe）
来場者数｜
111名（鑑賞サポート利用者数：車椅子席3名、手話の見やすい席34名）

Planning: Tokyo University UNiTe EMPOWER Project
Cast: HARUMI(Singer-songwriter), Ikumi Kawamata(The Nippon Foundation), Rika Sugata (UNiTe), Alexandria Wailes ([CODA] American Sign Language Director) *video appearance
Hosts: Satoshi Iiyama / Toshiyuki Sasa (UNiTe)
Number of Visitors: 111 (Viewing Support Users: 3 wheelchair spaces, 34 seats providing an easier view of the sign language interpreter)

Ripple

日本語バリアフリー字幕の制作に協力

『コーダ あいのうた』は、当初はバリアフリー字幕の制作予定がありませんでした。TCFFのイベントでの上映に向けて、フェスティバルとして字幕制作協力を行いました。それにより、全国46館でもバリアフリー字幕版の上映が実施され、主に聴覚障害者への鑑賞機会が提供されました。

Co-Production of Japanese Barrier-Free Subtitles

[CODA] did not plan to create barrier-free subtitles initially. As a Festival, we had worked together to create subtitles for the TCFF screening events. This resulted in screenings of the film's barrier-free subtitled version at 46 theaters throughout Japan and provided a great viewing opportunity mainly for those with hearing impairment.

True Colors Festivalの協働事業

Cooperative Projects with True Colors Festival

2019年度からスタートしたTrue Colors Festivalの取り組みは3年目を迎え、パフォーミングアーツの枠に止まらない協働事業の機会を得ることができました。ここでは主催演目以外でメディアと協働したTrue Colors Festivalの活動をご紹介します。

The True Colors Festival began cultivating cooperative projects in 2019 and for our third year, we were blessed to create projects that were not limited to performing arts. Here we introduce the True Colors Festival projects cooperated with media, apart from the main performances.

TCF×フジテレビ『True Colors Festival スペシャルライブ』

TCF x Fuji TV / True Colors Festival Special Live

フジテレビのオンラインイベント「THE ODAIBA 2021 バーチャル冒険アイランド」とのコラボレーション企画。専用アプリ内に設けられたバーチャル空間にTCFステージが登場し、これまでミュージックビデオなどに出演いただいた世界で活躍する障害のあるアーティスト6組が、日替わりでパフォーマンスを披露しました。ライブの様子は朝の情報番組「めざましテレビ」でも紹介されました。

This was a project created in collaboration with Fuji TV's online event <THE ODAIBA 2021 Virtual Adventure Island>. The TCF Stage was launched in the virtual space within an exclusive app where 6 globally-active groups of artists with disabilities, some of who have taken part in our past projects such as the music videos, took the stage one group each day. The show was featured in the morning news program <Mezamashi TV>.

開催日時｜2021年8月26日（木）～8月31日（火）　開催場所｜オンライン

Dates: **Thursday, August 26, 2021 - Tuesday, August 31, 2021**　Location: **Online**

鑑賞サポート｜日本語字幕、日本手話、（一部）国際手話

Viewing Support: Japanese subtitles, Japanese sign language, International Sign (partial)

出演｜イルアビリティーズ、木下航志、ジョナタ・バストス、マンディ・ハーヴェイ、アルヴィン・ロウ、ヴィクトリア・モデスタ

視聴者数｜13,568回

Cast: ILL-Abilities, Kohshi Kishita, Johnatha Bastos, Mandy Harvey, Alvin Law, Victoria Modesta

Number of Viewers: 13,568 views

ステージでは日本語字幕、日本手話、一部の楽曲には国際手話も提供し、6名の手話通訳者による、内容に応じた手話表現の幅を紹介する機会にもなりました。

手話通訳｜（日本手話）橋本一郎、那須映里、野﨑誠、小松智美、田村梢
（国際手話）アンバー・ギャロウェイ・ガレゴ

Japanese subtitles and Japanese sign language were provided as well as the International Sign for selected songs, showcasing the wide variety of sign language expressions brought forth by 6 sign language interpreters.

Sign Language Interpreters:
[Japanese Sign Language] Ichiro Hashimoto, Eri Nasu, Makoto Nozaki, Tomomi Komatsu, Kozue Tamura
[International Sign] Amber Galloway Gallego

TCF×SCHOOL OF LOCK!『SOCIAL LOCKS!』

「SCHOOL OF LOCK!」はTOKYO FMをキー局にJFN系38局で、平日夜22時から放送されるラジオ番組。「ラジオの中の学校」がコンセプトの同番組内で、年齢・性・障害などの「違い」に着目したコーナー「SOCIAL LOCKS!」の提供・コラボレーション企画をスタートしました。コーナーではこれまで、リスナーから届いた「女の子だけど女の子が好き」（大分県16歳）、「白杖を持っていても全盲とは限らない」（広島県18歳）、「吃音症の子がいたら、タイミングを取れるように少し待って」（東京都12歳）などの声をボイスメッセージで紹介。10代-20代に向けて、多様性について身近な出来事として触れ、考える機会を生み出しています。番組で取り上げられた声は、ウェブサイトでもレポートをお読みいただけます。

<SCHOOL OF LOCK!> is a radio program broadcasting on weekdays from 10 pm on 38 JFN stations, with TOKYO FM as its leading station. The program's concept is "school within the radio," and we have collaborated to sponsor and co-organize <SOCIAL LOCKS!>, a segment focusing on differences found in the likes of age, gender identity, and disabilities. The program has introduced voice messages from the listeners such as; "I'm a girl but I like girls" (age 16 / Oita prefecture); "A white cane doesn't always mean fully blind" (age 18, Hiroshima prefecture); "Please wait for a person who stutters to catch their rhythm" (age 12, Tokyo prefecture). Our expected audiences are teenagers and those in their twenties, and we aim to introduce diversity as something familiar, as well as a chance for them to think about diversity. The voices featured in the program are compiled on the official website.

開催日時｜2021年12月6日（月）～毎週月曜23時頃より約6分間

開催場所｜「SCHOOL OF LOCK!」内（TOKYO FM / JFN系38局）

Dates: **Airing began on Monday, December 6, 2021, for approx. 6 minutes from 11 pm, every Monday.**

Location: **In a segment of <SCHOOL OF LOCK!> (TOKYO FM / 38 stations of the JFN group)**

出演｜こもり校長（小森隼）、ぺえ教頭（ぺえ）

Casts: Principal Komori(Hayato Komori), Vice-principal Pee(Pee)

＜オンラインでの情報発信＞

TCFでは前年度から続くコロナ禍において、オンラインでの情報発信にも力を入れました。

◯VOICE（TCF公式サイト内）

関係者の声や演目への思いなどを届けるコーナーVOICEでは、True Colors FASHION、DIALOGUE、CIRCUSの出演者、制作者ら25名に取材したほか、アンバサダー、アドバイザリーパネルの方々による座談会では、近年のアクセシビリティについて包括的に語っていただく機会も得ることができました。

VOICE記事数10本(2020年度)→34本（2021年度）

◯インスタグラム、フェイスブック（TCF公式SNS）

TCFの公式SNS（インスタグラム、フェイスブック）は、TCFの海外PRを担当するシンガポールのチームLight Yearsが運営しています。2021年度は「教育」「娯楽」「刺激」「繋がり」という4つの柱を軸に、各演目に関連のある読みもの系コンテンツも投稿しながら、フォロワー数の増加と、コミュニティの構築を目指しました。SNSフォロワーの増加は、TCFのYoutubeチャンネルの視聴者数の増加にも貢献しています。

インスタグラムフォロワー　69%増　1,081人（2021年1月）→1,827人（2021年12月）
フェイスブックフォロワー　44%増　14,231人（2021年1月）→20,509人（2021年12月）

<Online Information Transmittance>

Continuing from last year, TCF has put the work into transmitting online information as well.

◯VOICE (within TCF official site)

In the VOICE column that focuses on the behind-the-scene viewpoints, we have interviewed 25 casts and production members from True Colors FASHION, DIALOGUE, and CIRCUS, and have reported on the Ambassadors and Advisory Panel's round-table talk on modern-day accessibilities.

Number of VOICE articles: 10 in the year 2020 to 34 in the year 2021.

◯Instagram and Facebook

TCF's official social media platforms (Instagram and Facebook) are managed by Light Years, a Singapore-based team in charge of TCF's overseas PR. In FY2021, they focused on growing the number of followers to build an engaged community. Their strategy was built around 4 pillars: Educate, Entertain, Inspire and Connect that served as a framework for every month's regular content.The increase in SNS followers has also contributed to an increase in the number of viewers of TCF's Youtube channel.

Instagram followers 69% increase from 1,081 (Jan 2021) to 1,827 (Dec 2021)
Facebook followers 44% increase 14,231 (Jan 2021) to 20,509 (Dec 2021)

＜波紋が広がる先には＞

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS パフォーミングアーツ事業部では、2019年から開催する「True Colors Festival -超ダイバーシティ芸術祭」（以下「TCF」）として、2021年度は5つのプログラムを実施しました。

新型コロナウイルス感染拡大により延期していた3演目「True Colors DIALOGUE」「True Colors CIRCUS」「True Colors FASHION（ファッションショー）」は、当初の予定から一年以上の期間を経て、一部企画内容を見直しながら、あらためて稽古やリハーサルを行い、実施することができました。ミュージックビデオ「You Gotta Be」には、国内外の障害のあるアーティストが参加し、演奏だけではなく日常の姿を捉えた内容が好評で、これまでに約170万回の視聴がありました。2度目の開催となった「True Colors Film Festival（以下「TCFF」）」では、オンライン配信と上映会を実施。配信では前年の3倍となる約2万4000人の方が視聴しました。これらプログラムのほかにも、フジテレビと連携した音楽コンテンツの配信、東京FMの人気ラジオ番組「SCHOOL OF LOCK!」と連携した多様性を考えるコーナー「SOCIAL LOCKS!」の立ち上げなど、TCFの活動は多岐に渡りました。

今年度の事業を通して、いくつかの特徴を挙げることができます。インターネットやマスメディアを通じた取組では、より多くの方に広く、障害のあるアーティストの活躍や多様性のメッセージを伝えるとともに、多様性についてより関心を深め、意識の変化を促す機会の創出に力を入れました。「You Gotta Be」「True Colors FASHION」などの配信コンテンツを題材に、未就学児や小学生、大学生らが鑑賞をした後、ファシリテーター・映像制作者とともに内容を深く掘り下げディスカッションをする「アウトリーチ・プログラム」がその例です。ここでは、一方向に配信を行うだけでなく、作り手と受け手の双方向のやり取りから生まれる議論や学びを大切にしています。

TCFFでは、コーダ（ろう者に育てられた聴者の子）を主人公にした映画「コーダ　あいのうた」の先行上映会を東京で開催するにあたって、新たに日本語のバリアフリー字幕を制作しました。この字幕は後に同作の劇場公開時にも活用され、TCFをきっかけに全国の情報保障を求める方に向け、鑑賞機会を広げることができた例と言えます。

2021年は「東京2020パラリンピック」が開催された年でもありました。「True Colors CIRCUS」や「True Colors FASHION」に出演したアーティストをはじめ、これまでTCFに参加した多くの表現者や関係者がパラリンピックの開閉会式でも活躍をしました。これもまたTCFの活動が実を結んだ一つの例と呼べるでしょう。本書では、パラリンピック開閉会式に裏方として深く関わった栗栖良依さん、出演者の小澤綾子さん、鹿子澤拳さんに、近年活躍する障害のあるアーティストや2021年を経た社会変化について、対談いただいています。

このようにTCF事業から波紋が広がるように生まれた様々な活動を「Ripple（＝波紋）」と名付け、本書で紹介しています。2021年度の活動はコロナ禍やオリンピック・パラリンピックといった時流の変化の中、パフォーミングアーツや映像作品という単一の枠にとどまるのではなく、まさにいくつもの波紋が広がるように、表現者、制作者、鑑賞者を巻き込みながら様々な相互作用を生み出した年度だったと振り返ります。これまでに積み重ねてきたTCFの活動やそこに関わった人々が、今後どのような未来を描くのか。そこでもまたTCFの真価が問われることでしょう。

今後もTCFでは、対面とオンラインを組み合わせながら、活動の場を国内外で広げていく予定です。TCFの活動にご期待いただくとともに、ご支援ご協力をいただければ幸いです。

日本財団DIVERSITY IN THE　ARTS
パフォーミングアーツ事業部 部長
True Colors Festival プロデューサー
森真理子

<What Lies Beyond the Ripples>

The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS Performing Arts Division had implemented five programs in the fiscal year of 2021 for "True Colors Festival" which began in 2019.

<True Colors DIALOGUE>, <True Colors CIRCUS>, and <True Colors FASHION> (a fashion show) which were delayed for over a year due to the pandemic were altered and implemented through dedicated practices and rehearsals. The music video <You Gotta Be> united artists with disabilities from all around the globe and its peek into their daily lives was favorably received, and has since gained close to 1.7 million views. The second implementation of <True Colors Film Festival> (hereafter TCFF) was streamed online and held physical screening events. Online streaming had gained three times the number last year, coming in at about 24,000 viewers. Other projects included but not limited to the launch of diversity-oriented <SOCIAL LOCKS!> broadcasted within the popular music program <SCHOOL OF LOCK!>, and music streaming content co-produced with Fuji TV.

We can list a few attributes of this year's programs. With the online and broadcasted programs, we focused on reaching a wider audience to project our message of diversity and the works of artists with disabilities; we aimed to create a deeper interest in diversity and opportunities to change perspectives. For instance, the streamings of <You Gotta Be> and <True Colors FASHION> were in some cases followed by outreach programs where facilitators/producers discussed with preschool children, elementary students, and university students to achieve a richer understanding. Here, we aspired for not only a one-way output but an open discussion and learning for both producing and the receiving.

TCF had created the Japanese barrier-free subtitles for the film <CODA>, a film that revolves around CODA (Child Of Deaf Adult), upon its advance screening in Tokyo. The subtitles were used onwards at its theater screenings and became an example of TCF providing information transmittance to those in need nationally, expanding the reaching opportunity.

The year 2021 was also the year of the 2020 Tokyo Paralympic Games. Artists from <True Colors CIRCUS> and <True Colors FASHION>, as well as casts and members from our past programs, took part in the opening and closing ceremonies of the Paralympics; another example of the fruition of TCF's steady work. For this booklet, we asked three members involved in the ceremonies, Yoshie Kris, a significant Stage Advisor of the ceremonies, and Ayako Ozawa and Ken Kanokozawa, the performers, to discuss the social difference they've seen in 2021 and recent actions by artists with disabilities.

Other newly started projects developed in response to the TCF projects. We have named them <Ripples> and have introduced them in this booklet. Just as ripples cross each other, in the changing times of the pandemic and the Olympic and Paralympic Games our implemented programs did not stay within any particular genre such as performing arts or film but pushed the performers, producers, and viewers to get involved to create bigger actions. What will the past acts of TCF and the people involved reach in the future? We must wait to see that share of TCF's accomplishments.

TCF will continue to widen our field on and off-line, nationally and internationally. We ask for your continued support, and please look forward to what's to come for us next.

Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS
Performing Arts Division Director
True Colors Festival Producer
Mariko Mori

メディア露出 | Media Coverage

国内 | Japan	TCF全体	True Colors DIALOGE	True Colors CIRCUS	True Colors FASHION・ショー	You Gotta Be	True Colors Film Festival 2021
テレビ | TV	0	0	3	3	0	0
ラジオ | Radio	0	0	1	0	0	1
新聞 | Newspaper	7	1	8	7	0	2
雑誌 | Magazine	0	2	1	0	0	1
ウェブ | Web	178	43	125	273	6	100
合計 | Total	185	46	138	283	6	104
海外 | Oversea						
テレビ | TV	-	-	-	0	0	0
ラジオ | Radio	-	-	-	0	3	0
取材記事 | Articles	-	-	-	34	42	12
メディアアウトリーチ Media Outreach	-	-	-	897	890	1007
その他 | Other	-	-	-	0	0	3
合計 | Total	-	-	-	931	935	1022

主な掲載例 | Notable Coverage

テレビ

True Colors FASHION
「news zero」　日本テレビ（2021年5月25日）
ファッションショーの狙いやコンセプト、衣装についての落合陽一さんへのインタビュー

True Colors CIRCUS
「サンデーLIVE!!」　テレビ朝日（2021年5月30日）
ソーシャルサーカスの可能性について、パフォーマーへのインタビューなどから紹介

ラジオ

True Colors CIRCUS
「simple style ーオヒルノオトー」　JFN（2021年5月11日）
パフォーマー東野寛子さんがスタジオ出演

You Gotta Be
「The Pulse」　BFM 89.9（マレーシア、2021年6月23日）
ディレクターのシドニー・タンさんがMVの狙いや出演アーティスト、制作過程などについて紹介

新聞

True Colors DIALOGUE
「日経MJ」　日本経済新聞社（2021年4月10日）
『中本千晶のレビューれびゅー』

True Colors FASHION・ショー
「読売新聞/夕刊」　読売新聞東京本社（2021年6月17日）
『多様性ありのままに オンラインでファッションショー』

Web

True Colors Festival
「フジテレビュー!! YouTube」（2021年4月2日）
ダンス!ファッション!ミュージカル!etc 誰もが楽しめるパフォーミングアーツの祭典が開催

True Colors DIALOGUE
「AERA dot.」（2021年4月11日）
超ダイバーシティ芸術祭で上演「二度と体験できない」意欲作 多様な性体験が切り口

True Colors CIRCUS
「ステージナタリー」（2021年4月25日）
野外サーカス「T∞KY∞～虫のいい話～」中止公演、全編映像がYouTubeで配信へ

True Colors FASHION・ショー
「WWD JAPAN.COM」（2021年5月26日）
“1%（＝マイノリティー）”に込めた想い 「今週の特集お届け隊」2021年5月24日号

You Gotta Be
「The Straits Times」(シンガポール, 2021年6月24日)
シンガポールから参加したアーティストとともにミュージックビデオの概要を紹介

TRUE COLORS FILM FESTIVAL 2021
「Time Out」(アメリカ, 2021年11月25日)
配信プラットフォームごとに上映作品を紹介

TV

True Colors FASHION
[news zero] Nippon TV (May 25, 2021)
Cover on the fashion show's aim and concept along with an interview with Yoichi Ochiai about the garments.

True Colors CIRCUS
[Sunday LIVE!!] TV Asahi (May 30, 2021)
Featured the possibility of social circus through interviews with the performers.

Radio

True Colors CIRCUS
[simple style - ohiru no oto -] JFN (May 11, 2021)
Performer Hiroko Higashino made an appearance as a guest.

You Gotta Be
[The Pulse] BFM 89.9 (Malaysia, June 23, 2021)
Director Sydney Tan appeared to present the aim of the music video, the casts, and the production process.

Newspaper

True Colors DIALOGUE
[Nikkei MJ] Nikkei Inc. (April 10, 2021)
[Chiaki Nakamoto's Review Review]

True Colors FASHION Show
[Yomiuri Shimbun / evening paper] The Yomiuri Shimbun Tokyo Main Office (June 17, 2021)
“Intactly diverse, an online fashion show”

Web

True Colors Festival
[Fuji TV View!! Youtube] (April 2, 2021)
Dance! Fashion! Music! etc. A performing arts festival for everyone

True Colors DIALOGUE
[AERA dot.] (April 11, 2021)
Super-diverse arts festival shows an ambitious piece presenting a never-again experience: approaching to various sexual experiences

True Colors CIRCUS
[Stage Natalie] (April 25, 2021)
Outdoor Circus “T∞KY∞ - Too Good to be a Bug” canceled, full documentation to be streamed on YouTube

True Colors FASHION Show
[WWD JAPAN.COM] (May 26, 2021)
The thoughts behind “1% (= minority)” [Weekly Features Otodoke-Tai] May 24, 2021 issue

You Gotta Be
[The Straits Times] (Singapore, June 24, 2021)
Cover on the overview of the music video along with introduction to the Singaporean artists.

TRUE COLORS FILM FESTIVAL 2021
[Time Out] (America, November 25, 2021)
Introduced the films according to each streaming platforms.

公式SNS一覧 | Official Social Media Links

- https://www.youtube.com/c/TrueColorsFestival
- https://twitter.com/TrueColorsFest
- https://www.facebook.com/TrueColorsFestivalOfficial
- https://www.instagram.com/truecolorsfestival/
- TikTok: https://www.tiktok.com/@truecolorsfest

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
パフォーミングアーツ事業部
2021年度 活動報告書

発行・編集：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS

デザイン：相模友士郎
翻訳：石居萌
写真：冨田了平（3_活動報告）
　　　髙木美佑（True Colors FASHION）
発行日：2022年4月21日

The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS
Performing Arts Division
2021 Annual Report

Published & Edited by The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS

Design: Yujiro Sagami
Translation: Moe Ishii
Photos by: Ryohei Tomita (3_Project Report)
　　　Miyu Yakaki (True Colors FASHION)
Publish date: April 21, 2022